

氏名	後藤 振一郎
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博乙第4494号
学位授与の日付	平成30年12月27日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Epidemiology of Pediatric Acute Encephalitis/Encephalopathy in Japan(日本における小児急性脳炎脳症の疫学的特徴)
論文審査委員	教授 小林勝弘 教授 阿部康二 准教授 黒住和彦

学位論文内容の要旨

今回我々は日本における全国調査で得られた疫学データを用いて小児の急性脳炎・脳症の病因について検討した。2007年に日本全国の小児科部門を持つ病院に2回の質問票の送付を行った。1回目で2005年から2006年の2年間の小児の急性脳炎・脳症発症数を把握し、2回目でそれらの臨床症状の詳細について質問を行った。全体で15歳以下の636例の小児の急性脳炎・脳症が登録された。原因が判明した症例(全体の63.5%)では26種類の病原体と2種類の病態が報告された。しかし36.5%の病因は不明であった。病因としてはインフルエンザウイルス(26.7%)、突発性発疹(12.3%)、ロタウイルス(4.1%)が多く、発症年齢は1歳が最も多かった。この傾向はすべての病因で共通していた。小児の脳炎・脳症の発症時の神経症状について検討するとけいれんは3歳以下に多く、異常行動はより年長児多い傾向があった。死亡例や重度後遺症を残した予後不良例はマイコプラズマ以外の原因病原体にいずれも高率に認められた。

論文審査結果の要旨

小児の急性脳炎・脳症は重大な疾患であり、その病因や臨床症状に関する知見は重要であるが、頻度が低いためその全貌は十分明らかではない。

本研究では、2007年に日本全国の小児科部門を有する病院に質問紙を送ることで情報を収集した。その結果15歳以下の636例の小児の急性脳炎・脳症が登録され、原因が判明したのは63.5%で26種類の病原体が報告された。発症年齢は1歳が最も多かった。症状については、けいれんは3歳以下に多く、異常行動は年長児に多い傾向があった。予後不良例はマイコプラズマ以外の原因病原体で多かった。

委員からは新知見につき質問があり、本研究者は予後がマイコプラズマ以外の病原体では一律に不良で差を認めなかったことを示した。またより症例数を増やし治療効果も検討に加えることが将来の研究として期待された。

本研究は、小児の急性脳炎・脳症の病因について重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。